

## 『関原首帳（福嶋家）』について

白 峰 旬

## はじめに

首帳とは「戦場で討ち取った敵の首と、それを討ち取った人の名前とを記す帳簿」<sup>(1)</sup>である。本稿で扱う『関原首帳（福嶋家）』は、関ヶ原の戦いにおいて、福島正則隊が討ち取った敵の首の数と討ち取った福嶋家家臣の名前を記載したものである。『関原首帳（福嶋家）』は東京大学史料編纂所ホームページの所蔵史料目録データベース<sup>(2)</sup>において『史料稿本 四十三』に収録されているが、活字化されていないためか、これまでの関ヶ原の戦いに関する研究史において、『関原首帳（福嶋家）』について論及した研究は管見の限り見られないので、本稿では、この『関原首帳（福嶋家）』の内容を検討することにしたい。

同様の史料としては、関ヶ原の戦いにおける細川家の「首注文」があり<sup>(3)</sup>、その内容については拙著『新解釈 関ヶ原合戦の真実－脚色された天下分け目の戦い』<sup>(4)</sup>において検討をおこなった。

なお、合戦における首取りの慣行については、すでに鈴木眞哉『刀と首取り－戦国合戦異説』<sup>(5)</sup>において論及されており、首取りがおこなわれた理由として「当時の武士たちにとっては、それが即功名につながっていたから」であり、「首取りは、このように誰でも、比較的容易に立てることのできる功名であったから、功名の代名詞ようになった」と指摘されている。

## 1. 首帳の内容についての検討

『関原首帳（福嶋家）』（以下、首帳と略称する）の内容をまとめて作表したものが表1である。表1を見るとわかるように、福島正則の家臣について、各組別に討ち取った敵の首の数と、その首を討ち取った家臣名が記されている。ただし、組に所属していないケースが4例あるが（山岡与兵衛、青木清衛門、福嶋河内、河内若党共也）、その理由は不詳である。各自が討ち取った首の数で最も多いのは4であるが（3例ある）、1 或いは2というケースがほとんどである。首を討ち取った福嶋家家臣の合計は計算すると、157人になる（「者共」というように複数形であっても便宜上、1人としてカウントし、陪臣や若党もカウントした）。

首の数は各組ごとに小計が記されているが、福嶋家全体での討ち取った首の合計に関する記載はない。よって、首の合計を計算すると208になる（ただし、堀久兵衛組の小計は11と記されているが、

計算すると10が正しいので実際には207になる)<sup>(6)</sup>。

よって、敵の首を討ち取った者だけの条件で考えると、平均して一人あたりが討ち取った敵の首の数は1.32(小数点第三位を四捨五入)になる。

次に、福島正則の総兵力数と首取りの関係を考えて、福島正則の総兵力数は6500なので<sup>(7)</sup>、6500の兵力数で208の敵の首を取ったことになるから、31.25人につき1つの首を取ったという計算になる。ただし、6500という兵力数は騎馬クラスの武士の総数ではなく、騎馬クラスの武士の家来(大名から見ると陪臣〔又家来〕にあたる。若党・中間・足軽など)も含めた総数と考えるべきであろう<sup>(8)</sup>。その証左として、江戸時代初期(慶長末年〔1614〕成立)の「福島家分限帳」<sup>(9)</sup>に記された福島家の家臣の総数は686人であり、何千人もいたわけではないことがわかるからである。

首帳における組数は、最初の福嶋伯耆組から最後の津田主水組まで22組あり<sup>(10)</sup>、そのほか福島正之(正則の嫡男)の直属部隊(「刑部太<sup>(マ)</sup>(大カ)夫扈従」、福島正則の直属部隊(「左衛門大夫扈従」)があるので、合計すると24組と考えてよからう。

各組ごとの討ち取った首の数(小計)を比較すると、最も多いのが牧野主馬組の21であり、福嶋内匠組の19がその次に多い。そのほか、10以上の組が5組ある(福嶋丹波組15、福嶋伯耆組14、尾関石見組14、堀久兵衛組<sup>(マ)</sup>11(10カ)、山路久丞組10)。逆に最も少ないのが梶田新介組の1であり、その次に少ないのは、合戦当日に組頭が討死した星野弥二衛門組の2である。

首帳という性格から、各組の総人数、各組頭の石高、敵の首を討ち取った者の石高は記載されていない。各組頭の石高については、江戸時代初期(慶長末年成立)の福島正則が広島城主時代の「福島家分限帳」<sup>(11)</sup>によれば、尾関石見…1万2234石5斗(三好城主)、福島丹波…1万2000石(神辺城主)、<sup>(マ)</sup>牧(牧野カ)主馬…7000石、林亀之介…1800石、鎌田主殿介…3000石であり、尾関石見と福島丹波は1万以上の支城主クラス、<sup>(マ)</sup>牧(牧野カ)主馬と鎌田主殿介は数千石クラスの大身家臣であったことがわかる。よって、組頭になるのは福島家の大身家臣が多かったということになる。

尾関石見、福島丹波、<sup>(マ)</sup>牧(牧野カ)主馬、林亀之介は前掲「福島家分限帳」においても組頭であり、平時における組編成がそのまま戦時における組編成に移行(スライド)できたと考えられる。その意味では、各組の編成が記載されている江戸時代初期の分限帳は、戦時における備<sup>そんえ</sup>(備の意味については後述する)の編成をそのまま平時の編成に持ち込んだ形であったということになる。例えば、肥後熊本藩主の加藤家の分限帳である「加藤侯分限帳(慶長十四五年之比)」<sup>(12)</sup>には、各組のほか一番手、二番手、三番手、後備にそれぞれ家臣名が記されている。つまり、江戸時代初期(慶長期～元和期)の分限帳は、戦時を想定して、そのまま各組をまとめて備を編成できるような構成になっていた、或いは、備の編成がそのまま分限帳に記載されていた、ということがわかるので、こうした視点から江戸時代初期(慶長期～元和期)の分限帳を検討していく必要がある。加藤家の分限帳の類例としては、宇喜多秀家の時代の「浮田家分限帳」、黒田家(福岡藩)の慶長分限帳、元和分限帳があり、いずれも各組頭の名前が記され、各組ごとに家臣名と石高が記されている<sup>(13)</sup>。

ちなみに、前掲「福島家分限帳」では合計で22組あり、首帳の組数が22組(福島正之と福島正則

の直属部隊は除く）である点と一致する。ただし、前掲「福島家分限帳」が慶長末年の成立であるのに対して、首帳の成立は慶長5年（1600）であることから、年代的開きがあるため、各組の組頭の名前は一致しないケースの方が多い。

なお、前掲「福島家分限帳」では、尾関石見組は30人（尾関石見は除く）、福島丹波組は30人（福島丹波は除く）、<sup>(マヌ)</sup>牧（牧野カ）主馬組は5人（<sup>(マヌ)</sup>牧（牧野カ）は除く）、林亀之介組は6人（林亀之介は除く）である。尾関石見組と福島丹波組の30人は、戦時を想定した場合、妥当な人数と思われるが、<sup>(マヌ)</sup>牧（牧野カ）主馬組、林亀之介組の人数は戦時を想定した場合、人数的に少なすぎる感じがする。というのは、後述のように（表2参照）、大坂の陣では、<sup>(マヌ)</sup>牧（牧野カ）主馬組は17人（<sup>(マヌ)</sup>牧（牧野カ）は除く）、林亀之介組は23人（林亀之介は除く）なので戦時には人数が増強された可能性が高い。

首帳の記載において注意されるそのほかの点は、以下のようになる。

①首取りをした者として、「是ハ石見自分之者共也 小野木太兵衛」、「是ハ主殿自分之侍也 渡邊六介」などというように、「自分之者共」あるいは「自分之侍」と記され、そのあとに名前が記された事例が9例ある。その内訳は「自分之者共」が3例、「自分之侍」が6例である。これらは、いずれも各組の組頭の名前のあとに「自分之者共」あるいは「自分之侍」と記されていることから、各組頭の武士の家来（つまり大名から見ると陪臣〔又家来〕にあたる）であり、各組頭の武士の<sup>ともまわり</sup>供廻りにいた武士を指している。そのため、福島正則の直接の家臣ではなく又家来にあたるので、わざわざ「自分之者共」あるいは「自分之侍」と記されたのであろう。首帳において、このように明確に記載区分されていた点は注目される。「自分之者共」と「自分之侍」の区分については、「自分之者共」というのは騎乗を許されない<sup>かち</sup>徒士身分の武士、「自分之侍」は騎乗を許された侍身分の武士という区分をしていると考えられる<sup>(14)</sup>。この点を概念図として図1<sup>(15)</sup>で説明すると、「自分之者共」は図1の（d）あるいは（e）における「徒」を指し、「自分之侍」は図1の（e）における主人以外の「騎馬」を指す、ということになる。

そのほか、首帳には「同（宇東）左兵衛者共」、「丹波家中之者共」という記載もあるが、この2例にはそれぞれ名前が記されていないので、徒士より身分の低い足軽や中間であった可能性が高い。その理由は、若党であれば、後述のように「若党」と記載されているので、徒士より身分が低く、若党以外で戦場において首取りができる者となれば足軽や中間になるからである。

②首取りをした者として、「孫八若党」（坂井孫八の若党という意味）のように記された事例が6例ある。このことは福島家家臣の若党が首取りをおこなったケースが6例あることを示している。若党とは「江戸時代、武家の郎従で、徒（徒士）より身分が低く、足軽・小者・中間より上位にあった者」<sup>(16)</sup>であり、「戦闘要員である若党は、武士としての処遇を受け」、「戦闘中は若党は主人の側から離れず、馬上で鎧をふるって敵に向かう主人の<sup>よりわき</sup>鎧脇（敵に向かっているときに無防備になる右側面）を守るのが任務とされていた。」<sup>(17)</sup>と指摘されている。

図1を見るとわかるように、若党は供廻りの一員であった。この6例のうち、若党の名前が記されているのは1例のみであり、他の5例には若党の名前の記載はない。若党の名前が記されている

1例にしても「久次郎」とのみ記されていて、苗字の記載はない。これは若党の身分が低かったことによるものであろう。ただし、若党でも戦場において首取りをおこなったことは注目してよからう。

③首帳には、鉄炮の者、つまり鉄炮足軽が首取りをしたケースが3例、鉄炮頭が首取りをしたケースが1例記されている。前者については「同(竹山久左衛門)鉄炮之者也」、「久三郎 是(坂井)小六カ鉄炮之者也」、「是ハ今井八□(郎カ)衛門カ鉄炮之者也 村山藤衛門」と記されていて、同じ鉄炮の者であっても、苗字・名前ともにないケース、名前みのみのケース、苗字・名前ともにあるケースに分かれる。その理由はよくわからないが、苗字・名前ともにあるケースは足軽身分ではなかった可能性も考えるべきかも知れない。この3例に共通するのは、それぞれの武士の家来(つまり大名から見ると陪臣〔又家来〕にあたる)であることがわかるので、この3例の鉄炮足軽は騎馬クラスの武士の共廻りの一員であったと考えられる。後者については、「鉄炮頭 藤井安衛門」として苗字・名前ともに記されているので、足軽身分ではないと考えられる。

このように、鉄炮足軽や鉄炮頭が首取りをしたのは、白兵戦では敵と近接して戦う乱戦になるので、鉄炮は役に立たなくなったからであろう。つまり、鉄炮足軽であれば、合戦の最初の段階で敵と鉄炮を撃ち合ったあとは何もしなかったのかというと、そうではなく、その後、白兵戦になれば首取りもしていることになる。

ここで注意したい点は、首取りをしたそれぞれの鉄炮足軽について、上述のように「○○カ鉄炮之者也」と記されていることである。こうした書き方(騎馬クラスの武士の共廻りの一員として把握されている)をしていることからすると、通説で指摘されるような、合戦時における兵科別の部隊の編成、つまり、それぞれの武士の家来である鉄炮足軽(陪臣)を引き離して、鉄炮足軽だけで鉄炮隊が組織された、という指摘が本当に正しいのか、という疑問が湧いてくるのである。

例えば、後述する大坂陣備人数帳(慶長19年〔1614〕11月6日付)では、一番備、二番備、福島忠勝の旗本備の各鉄炮足軽は、それぞれの備で鉄砲隊として単独で編成されているのではなく、20人単位、30人単位、50人単位で、600石～3600石の武士にそれぞれ付属する形で記載されている。このことは、戦時にそれぞれの鉄炮足軽が付属する武士から切り離されて、鉄砲隊という単一兵科部隊に組み直されたことを意味せず、平時の通常の段階から、20人単位、30人単位、50人単位で鉄砲隊を、管轄する武士のもとで編成しており、その鉄砲隊をそのまま戦時に投入した、ということを示している(ただし、これは大坂の陣のケースであり、関ヶ原の戦いのケースとは時代差がある)。戦時にそれぞれの鉄炮足軽が付属する武士から切れ離されて、鉄砲隊を編成したのであれば、このように人数的に端数が出ない、ということはあるまいであろう。

もちろん、白兵戦の時点では、乱戦になり兵科別の編成がバラバラになって戦った(白兵戦では乱戦になるので、兵科別編成が機能しなくなった)、と考えることもできるが、通説が指摘するように戦時に兵科別部隊が整然と編成されて兵科別に戦ったのであれば、この首帳においても鉄砲隊としてまとめて首取りの記載をするのではないだろうか(つまり、この戦いの当初から兵科別の編

成はされていなかった可能性がある)。

そもそも、この首帳には、鉄炮隊（鉄炮頭の記載はあるがそれが戦場における鉄炮隊の存在と直結するのか、鉄炮頭というのは平時の家臣団における単なる身分・職階ではないのか）のほか、長柄隊や弓隊の記載もなく、兵科別部隊が整然と編成されたのであれば、白兵戦になった時、これらの兵科別部隊はだれの指揮を受けてどのように戦ったのか、という疑問もある。むしろ、陪臣であるので、戦いの当初から主人（騎馬クラスの武士）の供廻りの一員として主人の側で戦っていたと考えるべきなのではないか。合戦時に兵科別部隊が編成されるのであれば、戦時における備の人数帳（後述する大坂陣備人数帳）に鉄炮隊<sup>(18)</sup>、弓隊、長柄隊などの記載がされるはずなのにそうした記載がないのはなぜなのか。少なくとも、関ヶ原の戦いの時点では兵科別の編成部隊が実際に戦ったということはなかったのではないかと。こうした疑問点については今後の課題としておきたい。

④組頭自らが敵の首を討ち取ったケースが11例ある（福嶋伯耆、仙石新八、武市内蔵助、福嶋内匠助、大崎兵庫助、黒田左平次、武藤長兵衛、鎌田主殿助、林亀介、坂井孫八、山路久丞）。また、組頭が討死したケースが1例ある（星野弥二衛門）。このことは、組頭も白兵戦において最前線で戦ったことを示しており、首取りをおこなって武功をあげるという点では、上級家臣である組頭であっても麾下の武士と同様に戦ったこと（組頭は単なる戦場における監督者の立場ではなかったこと）を意味している。

⑤この首帳には、山路久丞と青木清衛門の名前が出ているが、この2人については、合戦に当日参戦した生駒利豊の書状<sup>(19)</sup>に出てくる山路久忠、青木清右衛門と同一人物と考えてよからう。生駒利豊の書状では、この戦いにおいて、敵（宇喜多秀家の家臣）の一人を山路久忠の同心の者が押さえたが、青木清右衛門をかばって、福島正則の前へは青木清右衛門が討ち取ったということになった、と記されている。よって、この首帳では青木清衛門は首2つを討ち取ったと記されているが、そのうちの1つは山路久丞組の者から譲ってもらったもの、ということになる。そして、生駒利豊の書状における「山路久忠の同心の者」という記載は、この首帳で山路久丞が組頭であることと符合する。この点については、生駒利豊の書状内容の信憑性が高いことを示す証左となる。

この首帳の作成の経緯については、首帳の末尾に、筆者は金森安衛門<sup>(20)</sup>であり、(9月)15日の合戦について、(9月)17日に近江国上長原野（現滋賀県東江市市原野町か？）に野陣し、午の刻（昼の12時頃）に陣所が定まり、少し時間があつたので記した、と書かれている。よって、関ヶ原の戦いの翌々日に作成されたことがわかる。この首帳には「此人、金森カ帳ニ落タリ」とか「右之三人、帳ニ落ツ、余知故ニ爰載」と記されているので、後日、他の誰かが（氏名は不詳であるが、福島家家臣であろう）首帳の内容をチェックして補足したことがわかる。こうした経緯は、首帳が作成される時期（合戦の翌々日）やその後のチェックによる補足について、その実態がわかり興味深い。

## 2. 大坂の陣における福島家の備の人数帳との比較

この首帳には関ヶ原の戦いにおける福島家の備の編成が記されていないので、その点を考察するために、慶長19年の大坂冬の陣に出陣した福島忠勝（正則の嫡子）の備の人数帳（「備後守様大坂御陣への御備候人数之帳」。以下、大坂陣備人数帳と略称する）<sup>(21)</sup>の内容を検討したい。

備とは、樋口隆晴氏の指摘によれば、「戦国大名軍隊の戦術基本単位」<sup>(22)</sup>、「戦術レベルでの基本部隊単位」<sup>(23)</sup>であり、この大坂陣備人数帳には福島家の備の編成が記されている。大坂陣備人数帳の内容をまとめて作表したものが表2である。

表2によれば、福島家の備は、一番備、二番備、福島正勝の旗本備、跡備の4つの備から成立している。組数については、一番備が5組、二番備が6組、福島正勝の旗本備が4組、跡備が3組である。こうした備の構成要素をまとめて作表したものが表3である。

表3によれば、馬乗（騎馬クラスの武士）の数は福島正勝の旗本備が最も多い。その理由は、福島家の4つの備全体の最高指揮官である福島正勝を強力にガードするためという意味があるのだろう。鉄炮足軽の数が最も多いのは一番備である。その理由は、一番備は先鋒として最初に敵と交戦するため、強力な火力を必要としたからであろう。各組のそれぞれの知行合計を比較すると、一番備、二番備、福島正勝の旗本備は石高が近似しているのので、備を編成する時にそのように意図して編成したのであろう。組数については、上述のように、一番備が5組、二番備が6組、福島正勝の旗本備が4組、跡備が3組であり、二番備が最も組数が多い。

大坂陣備人数帳を見ると、各組に所属しない上級家臣がそれぞれの備の先頭に記載されている（ただし、跡備は記載がない）。その人数は一番備が3人、二番備が1人、福島正勝の旗本備が1人である。このように各組に所属しない上級家臣はそれぞれの備の全体を統括する指揮官としての役割を負っていたと考えられる。

こうした諸点を考慮したうえで、それぞれの備の性格を考えると次のようになる。

▼一番備…一番備は先鋒（先手）として最初に敵と交戦するため激戦が予想されるので、①一番備全体の指揮官は3人もいて他の備より指揮官の数が多い、②馬乗（騎馬クラスの武士）の数は、二番備、福島正勝の旗本備よりもやや少ないが、鉄炮足軽の数は他の備に比較して最も多く（鉄炮足軽が100人以上いるのは一番備だけである）、最初の交戦段階で火力で優位に立って敵を制圧する意図が伺える。

▼二番備…二番備は中備にあたり、他の備に比較して組数は最も多い。しかし、馬乗（騎馬クラスの武士）と鉄炮足軽の合計数で比較すると、一番備が204人、二番備が180人、福島正勝の旗本備が216人、跡備が63人であり、一番備、福島正勝の旗本備よりは数が少ない。二番備の性格としては、先鋒である一番備の後衛であると同時に、福島正勝の旗本備の前衛ということになる。

▼福島正勝の旗本備…組数は4組であり、一番備の5組、二番備の6組よりも少ないが、馬乗（騎馬クラスの武士）と鉄炮足軽の合計数は216人であり、他の備と比較して最も人数が多い<sup>(24)</sup>。上述

したように、馬乗（騎馬クラスの武士）の数についても、他の備と比較して最も人数が多く、福島正勝を強力にガードする目的のためと考えられる。この備は旗本備であるから、福島正勝の直属部隊という性格を持つ。

▼跡備…この跡備は、他の3つの備と比較して、①馬乗（騎馬クラスの武士）の数が最も少なく、福島正勝の旗本備の馬乗の数のちょうど半分の数である、②鉄炮足軽は全くいない、③知行合計は、他の3つの備のそれぞれの知行合計の約半分の石高である、④組数は最も少ない、⑤組に所属しない上級家臣（備の全体を統括する指揮官）はいない、という点が指摘できる。この点から考えると、備としては最も規模が小さく、特に鉄炮足軽が全くいないということは、後方からの敵の攻撃を想定していないことを示すものであろう。

馬乗の合計は388人であるが、大坂陣備人数帳の末尾には「惣侍合三百八十八人」（すべての侍の合計が388人という意味）と記されているので、馬乗＝侍ということになる。大坂陣備人数帳に名前が記された者が馬乗（騎馬クラスの武士）であることを考慮すると、関ヶ原の戦いの首帳に名前が記された者も馬乗（騎馬クラスの武士）であったと考えられる（ただし、首帳における陪臣や若党は除く）。

なお、大坂陣備人数帳の末尾の記載によれば、福島家の家臣は大坂の陣に出陣した人数以外に、江戸、広島、三原にもいた、としているので、大坂陣備人数帳に記されている家臣が福島家の全家人でないことは明らかである。

大坂陣備人数帳によれば、18組で4つの備を編成しているので、計算すると、4、5組で一つの備ということになる。関ヶ原の戦いの首帳では、上述のように22組（福島正之の直属部隊と福島正則の直属部隊は除く）であるので、4、5組で一つの備という基準で計算すると、22組で4.9（小数点第二位を四捨五入）の備ということになる。4.9の備を5つの備と考えると、5つの備＝先備（一番備）＋中備（二番備）＋福島正之の旗本備＋福島正則の旗本備＋後備あとごなえという編成であったと推測できる。

笠谷和比古氏の研究によれば、島原の乱では、秋月藩（黒田家）は5万石で2000人を越える人数で、先備、旗本備、後備、殿備の4つの備であった<sup>(25)</sup>。また、上述のように、肥後熊本藩主の加藤家の分限帳である前掲「加藤侯分限帳（慶長十四五年之比）」<sup>(26)</sup>には一番手、二番手、三番手、後備の4つの備が記されている。

よって、一つの大名家が出陣する場合は、石高や人数の多寡に関係なく、4つくらいの備の編成というのが標準的であったのかも知れない。なお、島原の乱では、秋月藩（黒田家）は5万石で2000人を越える人数を動員した、という点からすると、関ヶ原の戦いの時の福島正則は20万石（清須）で軍勢人数は、上述のように6500人なので、両者を比較した場合、石高が4倍なので動員人数も4倍として単純に計算すると8000人になるので、関ヶ原の戦いの時の福島正則の軍勢人数6500人という数字は過大な人数ではないことがわかる。

各組頭と各組が存在する点は、関ヶ原の戦いの首帳は大坂陣備人数帳と共通している。関ヶ原の

戦いの首帳で組頭として名前が記されていて、大坂陣備人数帳でも組頭などとして名前が記されているのは、福島丹波、尾関石見、鎌田主殿、梶田新助、林亀之助、牧野主馬である。尾関石見、鎌田主殿、梶田新助、林亀之助は大坂陣備人数帳では二番備の各組頭であり、牧野主馬は跡備の組頭である。福島丹波と尾関石見は、関ヶ原の戦いの首帳では組頭であったが、大坂陣備人数帳では、福島丹波は一番備の全体を統括する指揮官、尾関石見は二番備の全体を統括する指揮官になっている。

## おわりに

関ヶ原の戦いにおける福島正則隊の首帳についてその歴史的意義を考えると、首帳は白兵戦における首取りについて数値化することにより、白兵戦の実態を如実に物語る史料であり、この首帳は関ヶ原の戦いの 2 日後に作成されたことから一次史料として扱うことができると言えよう。そして首帳の記載形式から、福島正則隊がいくつの備から編成されていたのかについては記されていないものの、福島正則隊が各組によって編成されていることがわかり、後の大坂陣備人数帳によれば各組の集合体が備であることがわかるので、その組数比較から、関ヶ原の戦いにおける福島正則隊の備の編成についても推測することができた。

そして、首帳からは、陪臣や若党も首取りをしていることがわかるので、合戦の実態として、福島家家臣だけでなく、その従者も戦いに参戦していたことが明確に読み取ることができる。このことから、合戦に動員する軍勢の総人数を考える時、単に家臣数だけでなく、その従者の数も含めてカウントしている（つまり、動員された総人数は、単純な家臣数よりももっとふくれあがっていたことになる<sup>(27)</sup>）と見なすべきであろう。

また、首帳に記されているように「鉄炮之者」（鉄炮足軽）が首取りをしていることは<sup>(28)</sup>、上述したように、この戦いにおいて兵科別編成がおこなわれていたものの白兵戦で兵科別部隊がバラバラになって戦ったのか、或いは、兵科別編成がこの戦いの当初からなされていなかったのか、ということを考えるうえで重要な記載であると評価することができる。

もっと根本的なことを言えば、首帳の記載が兵科別になっていないことは何を意味するのか、という問題も考える必要がある。また、上述のように大坂陣備人数帳は各組の集合体が備であることを示しており、兵科別編成の諸隊の集合体が備であることを示していない。通説で指摘されるように、合戦時に整然と兵科別編成が出来て兵科別に戦ったのであれば、首帳の記載や大坂陣備人数帳の記載は当然兵科別になっているはずではないのか。しかし、そうになっていないのはなぜなのか、という根本的なテーゼ（命題）を考えることは、この時代における兵科別編成の有無を検討するうえで重要な問題である。こうした兵科別編成の有無を検討するためには、首帳だけでなく、江戸時代初期（慶長期、元和期）の分限帳についても、そうした視点からの内容分析をする必要がある。

また、「慶長期は軍事組織がそのまま行政組織になっており、まだ職制は細分化されていない」

という横田武子氏の指摘<sup>(29)</sup>を考慮すれば、軍事組織の機構がそのまま分限帳に反映されたという意味で、各大家家について、江戸時代初期（慶長期、元和期）の分限帳における組編成と、首帳における組編成との比較検討も必要になってくるが、これらの点の考察については他日を期したい。

〔註〕

- (1) 『日本国語大辞典（第二版）』4巻（小学館、2001年、977頁、「首帳」の項）。
- (2) 東京大学史料編纂所ホームページの所蔵史料目録データベース（<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>）。
- (3) 細川護貞監修『綿考輯録』2巻、忠興公（上）（出水神社発行、汲古書院製作・発売、1988年、359～364頁）。
- (4) 拙著『新解釈 関ヶ原合戦の真実－脚色された天下分け目の戦い』（宮帯出版社、2014年、65～77頁）。
- (5) 鈴木貞哉『刀と首取り－戦国合戦異説』（平凡社、2000年）。詳しくは、同書の第5章「首取りと刀」、第6章「刀と首取りの行方」を参照されたい。
- (6) 細川家の首注文も同様に首の数は各組ごとに小計が記されている。細川家の首注文では、細川家（正確には細川忠隆の軍勢）全体での討ち取った首の合計に関する記載があり136（ただし、実際に計算すると135になる）と記されている（前掲・細川護貞監修『綿考輯録』2巻、忠興公（上）、359～364頁）。よって、関ヶ原の戦いで討ち取った首の数では福島家の方が細川家よりも多いことになる。このことは福島正則が石田方の軍勢が布陣した山中攻めの先手<sup>さきづ</sup>であった（「吉川広家自筆書状案（慶長5年9月17日）」、『吉川家文書之二』（大日本古文書）、東京帝国大学編纂・発行、1926年、913号文書）ことと関係するのかも知れない。つまり、福島正則は先手であったため、敵との戦いが激戦となり、結果的に敵の首を多く討ち取った、と考えることもできる。
- (7) 前掲・拙著『新解釈 関ヶ原合戦の真実－脚色された天下分け目の戦い』（115頁）。史料的根拠は「（慶長5年）8月21日付福島正則覚書」（『岡文書』）による。
- (8) 戦時における軍制については、笠谷和比古『近世武家社会の政治構造』（吉川弘文館、1993年）の第5章第2節「近世の軍制と身分制」（167～176頁）、笠谷和比古「出陣図屏風に描かれた近世軍制－秋月黒田家『島原陣図屏風』をめぐる－」（小島道裕編『武士と騎士－日欧比較中近世史の研究－』、思文閣出版、2010年）、根岸茂夫『大名行列を解剖する－江戸の人材派遣－』（吉川弘文館、2009年）の「近世の軍隊と家臣団の構造」（23～33頁）を参照されたい。
- (9) 『広島県史』近世資料編Ⅱ（広島県、1976年）。
- (10) 首帳の末尾に「右之三人、帳ニ落ツ、余知故ニ爰載」と記された補足の記載箇所には「杉浦与七七<sup>(ママ)</sup>」組という記載があり、この組は福嶋伯耆組から津田主水組までの22組には含まれていないので、「杉浦与七七<sup>(ママ)</sup>」組を入れると23組になるが、この組は首帳の当初の記載からは漏れているので、22組として考察を進めたい。
- (11) 前掲『広島県史』近世資料編Ⅱ。福島家の分限帳としては、このほかに、「福島正則家中分限帳」（『続群書類従』25輯上、続群書類従完成会、1924年。『大日本史料』12編の30、東京帝国大学文学部史料編纂所、1932年）

があるが、各組の組頭の名前や記載の順序などについて大きな相違はない。

- (12) 『肥後加藤侯分限帳』(新潮社、1987年)。鈴木喬氏の解題によれば、その内容検討から加藤清正死後のものであることは明らかで、元和8年(1622)より降るのではないかとしている。
- (13) 『浮田家分限帳』(前掲『続群書類従』25輯上)。この分限帳の末尾には「右是者、慶長五之春迄之分限之由、申傳候。尤秀家公御代。」と記されている。福岡藩の「慶長分限帳」、「元和分限帳」(福岡地方史研究会編『福岡藩分限帳集成』、海鳥社、1999年)。福岡藩の「慶長分限帳」の冒頭には「慶長六年正月、中津分筑前江御打入之節、諸給人分限帳」と記されている。横田武子「【解題】福岡藩の分限帳について」(前掲・福岡地方史研究会編『福岡藩分限帳集成』、714頁)では「本史料の成立年代は慶長13(1608)年前後と推測できる」としている。福岡藩の「元和分限帳」の表紙には「元和九年十二月改」と記されている。横田武子「【解題】福岡藩の分限帳について」(前掲・福岡地方史研究会編『福岡藩分限帳集成』、715頁)では「本史料の成立は元和の初期と推測できる」としている。
- (14) 徒士については「武士身分としての徒士は、将軍・大名、大身たいしんの武士ちからゆうの家中ちゆうちゆうにみられる、騎乗を許されない徒歩ひいふくの軽格けいかくの武士を言う。騎乗を許された侍さむらいとともに士分しぶんとして扱われ、足軽あしがる・中間ちゆうかんの軽輩けいはいとは区別されていた。」(『日本史大事典』2巻、平凡社、1993年、「徒士」の項、執筆は北原章男氏)と指摘されている。
- (15) 図1は、前掲・根岸茂夫『大名行列を解剖する-江戸の人材派遣-』の図7(31頁)から引用した。
- (16) 『国史大辞典』14巻(吉川弘文館、1993年、850頁、「若党」の項、執筆は服藤弘司氏)。前掲『国史大辞典』14巻(850頁)では、さらに「もっとも、かかる序列は、諸大名間はもちろん幕府内でも、それほど厳格に確立されていたわけではなく、若党が足軽の下位とされることがあり、また中間と同意に用いられることもあった」としている。
- (17) 『日本史大事典』6巻(平凡社、1994年、1299頁、「若党」の項、執筆は高木昭作氏)。
- (18) ただし、鉄炮隊という明確な記載はないが、鉄炮隊に該当すると思われる分散した記載が、上述のように大坂陣備人数帳には確認できる。
- (19) 前掲・拙著『新解釈 関ヶ原合戦の真実-脚色された天下分け目の戦い』(53~54頁)。この生駒利豊書状(「極月13日付坪内定次宛生駒利豊書状」)は生駒陸彦・松浦武編『生駒家戦国史料集-尾張時代の織田信長・信雄父子を支えた一家』(松浦武氏発行の自家版、秀文社印刷、1993年)に収載されている。
- (20) 金森安衛門は福島家の家臣と考えられるが、前掲「福島家分限帳」、前掲「福島正則家中分限帳」、後掲の大坂陣備人数帳に名前の記載はない。
- (21) 前掲『広島県史』近世資料編Ⅱ。大坂陣備人数帳は慶長19年11月6日付で福島正則が重臣の福嶋丹波守・尾関石見守・上月文右衛門に対して出したものである。福島正則はこの時は江戸にいて出陣していない。
- (22) 樋口隆晴「1軍隊編成-大将・兵・部隊の実態」(歴史群像編集部編『図説戦国入門』、学研プラス、2016年、9頁)。
- (23) 樋口隆晴「1軍隊編成-寄子・寄親制」(前掲・歴史群像編集部編『図説戦国入門』、11頁)。
- (24) 笠谷和比古氏は、備についての説明の中で「旗本備」は最も規模が大きい、「備」としての構成については、ほかと質的には変わらないのが通例である。それは量的に「備」が厚いということなのである。」

と指摘している（前掲・笠谷和比古「出陣図屏風に描かれた近世軍制－秋月黒田家『島原陣図屏風』をめぐって－」）。この笠谷氏の指摘によれば、旗本備は最も規模の大きい備ということになる。

- (25) 前掲・笠谷和比古「出陣図屏風に描かれた近世軍制－秋月黒田家『島原陣図屏風』をめぐって－」。
- (26) 前掲『肥後加藤侯分限帳』。
- (27) 福島正則の広島城主時代の福島家分限帳である前掲「福島家分限帳」（前掲『広島県史』近世資料編Ⅱ）の総家臣数を計算すると686人であり、「福島正則家中分限帳」（前掲『続群書類従』第25輯上）には馬乗が630人と記されている。よって、上述したように関ヶ原の戦いにおける福島正則の軍勢数6500というのは、単純に計算して総家臣数の9.5倍（小数点第二位を四捨五入）、馬乗（騎馬クラスの武士）の合計数の10.3倍（小数点第二位を四捨五入）になる。ただし、この分限帳は、関ヶ原の戦いの後に福島正則が加増された広島城主時代（49万8000石）のものであり、清須城主時代（20万石）よりも大幅に石高が加増されているので、清須城主時代の家臣数をもっと少なかったと考えられ、そうなると、さらにこの倍率は高くなる。
- (28) この首帳では「鉄炮之者」（鉄炮足軽）が首取りをしたケースは、上述のように3例ある。関ヶ原の戦いにおける福島正則隊の中で「鉄炮之者」（鉄炮足軽）が合計でどれくらいいたのかは不明であるが、この3例を福島正則隊の中でレアケースと見なすべきなのかどうか、という点は今後の検討課題である。

なお、「鉄炮之者」（鉄炮足軽）が首取りをした状況としては、①両軍が交戦した最初の鉄炮の撃ち合いの段階で敵を撃ち倒して、その敵の首を取ったケース、②両軍による鉄炮の撃ち合いが終り、その後、白兵戦に移行した段階（つまり、鉄炮が役に立たなくなるほどの近接戦の段階）で、鉄炮の射撃とは関係なく敵の首を取ったケース、というように2つのケースが想定できるが、「鉄炮之者」（鉄炮足軽）が首取りをしたケースが、上述のように3例しかないことを考慮すると、後者のケースの可能性が高いと考えられる。

他の大名家との事例比較としては、関ヶ原の戦いにおける細川家の首注文では「鉄炮衆」が首取りをしたケースが1例、切り捨てにしたケースが2例記されている（前掲・細川護貞監修『綿考輯録』2巻、忠興公（上）、360頁）。こうした他家の事例との比較検討も今後必要であろう。

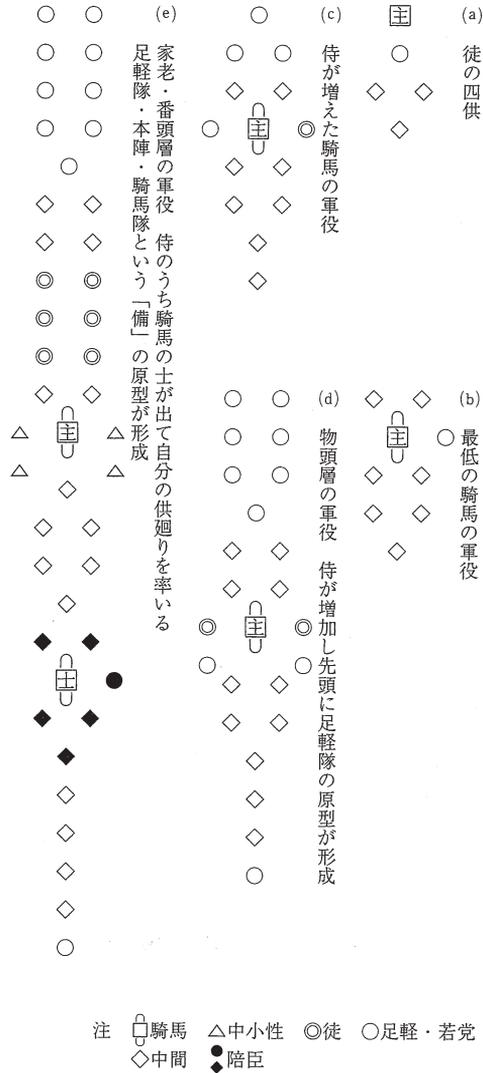
- (29) 横田武子「【解題】福岡藩の分限帳について」（前掲・福岡地方史研究会編『福岡藩分限帳集成』、714頁）。

## 【付記】

東京大学史料編纂所ホームページの所蔵史料目録データベースにおける『史料稿本』の検索・閲覧方法について、東京大学史料編纂所前近代日本史情報国際センターの鴨川達夫先生からは御懇切な御教示をいただきました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

図 1

武士の軍役の規模と供連との関係についての概念図



※根岸茂夫『大名行列を解剖する－江戸の人材派遣－』（吉川弘文館、2009年、31頁）の「図7 武士の階層と軍役・供連」より引用。

表1  
『関原首帳（福嶋家）』

（東京大学史料編纂所蔵『史料稿本』四十三）

【凡例】※…作表にあたり補足した文を示す。

①～④…作表にあたり各組名の前に数字を補足した。

①福嶋伯耆組		
	1	福嶋伯耆 討取
	1	上月久兵衛
	1	岩室助太郎
	1	岩間三左衛門
	1	柴田十兵衛
	2	細野与衛門
	2	入川助作
	1	宇東左兵衛
	4	同（宇東）左兵衛者共
合計 14		
②福嶋丹波組		
	2	大久保三吉
	1	安東六左衛門
	2	富田茂衛門
	2	中尾太左衛門
	2	土居次左衛門
	1	江戸十左衛門
	1	吉川三吉
	4	丹波家中之者共
合計 15		
③仙石新八組		
	1	仙石新八
	2	仙石兵藏
合計 3		
④尾関石見組		
	1	伊藤茂助
	1	大野次郎左衛門
	1	瀧忠介
	1	和田清衛門
	1	小塚作衛門
	1	□（枋カ）岡彦三衛門
	1	武藤三衛門
	2	梶田新之助
	1	伊藤平左衛門
	1	是ハ石見自分之者共也 小野木太兵衛
	2	真鍋源（孫）左衛門
	1	星野半七
合計 14		

⑤武市内蔵助組		
	1	武市内蔵助
	2	武市清兵衛 (三郎)
	2	山隅次兵衛
	1	吉田平三郎
	1	栗本忠左衛門
合計 7		
⑥牧野主馬組		
	2	堀池武兵衛
	2	紀多次郎左衛門
	2	遠山長衛門
	1	安井十五衛門
	1	乾金衛門
	2	畔部次左衛門
	2	田口又左衛門
	2	浅田三介
	1	岡吉左衛門
	2	加藤市衛門
	1	是ヨリ <sup>(マ)</sup> (ハカ) 主馬自分之者共也 今枝勘介
	1	豊嶋忠衛門
	1	東喜兵衛
	1	東方左兵衛
合計 21		
⑦堀久兵衛組		
	2	村上五兵衛
	1	後藤半三郎
	1	石田九郎左衛門
	1	浅岡三衛門
	1	長野勘衛門
	1	鈴木市衛門
	1	吉田左兵衛
	1	是ヨリ <sup>(マ)</sup> (ハカ) 久兵衛自分之者 (「共」脱カ) 也 川音傳次
	1	山中勝五郎
合計 11 (10カ)		
⑧福嶋内匠組		
	4	是ハ自分之者共ニ 福嶋内匠助
	1	岡田半衛門
	1	飯尾加兵衛
	1	林三衛門
	1	小波権衛門
	2	長田左助
	1	山本吉衛門
	1	谷崎九衛門
	1	三川伊兵衛
	2	奥田勘左衛門

	2	是内匠自分之侍也 中村半二郎
	1	竹山久左衛門
	1	同（竹山久左衛門）鉄炮之者也
合計 19		
	1	山岡与兵衛
⑨大崎兵庫組		
	3	牧野新九郎
	1	家田彦八郎
	1	村瀬太郎兵衛
	1	大崎兵庫助
	1	是兵庫自分之侍也 野村藤十郎
	1	磯野甚七
	1	高田久三郎
合計 9		
⑩黒田左平次組		
	1	黒田左平次
	3	鈴木半弥
	1	半弥若党
	1	上月助三郎
	1	助三郎若党
	1	松崎二左衛門
合計 8		
⑪武藤長兵衛組		
	1	武藤長兵衛
	2	湯浅四郎兵衛
	1	奥理介
	1	福富次兵衛
合計 5		
⑫鎌田主殿組		
	1	鎌田主殿助
	1	石原甚左衛門
	1	富田十左衛門
	1	浦上等三郎
	1	神野権衛門
	1	是ハ主殿自分之侍也 渡邊六介
合計 6		
⑬林亀介組		
	3	林亀介
	2	坂井清六
	1	林孫三
	1	山場平兵衛
	1	添田作内
合計 8		
⑭坂井孫八組		
	1	坂井孫八
	1	津田小源太

※いずれかの組に所属した記載はない

	2	石黒勘兵衛
	2	武藤助左衛門
	1	(坂井) 孫八若党
合計 7		
⑮瀧川弥次郎組		
	1	渡邊弥兵衛
	1	大屋十蔵
	2	加川次衛門
	1	伊藤孫兵衛
	1	堀田勘衛門
	2	鈴木傳三郎
	1	田中忠左衛門
合計 9		
⑯山路久丞組		
	1	山路久丞
	1	同(山路)四郎兵衛
	1	大橋市衛門
	1	水澤孫衛門
	1	植田忠左衛門
	1	宮崎次介
	2	是目 <sup>(マ)</sup> (ハカ) 久丞自分之侍也 森田与介
	1	江森太郎八
	1	林清六
合計 10		
⑰星野弥二衛門組、弥二衛門、此日討死		
	1	大崎源衛門
	1	加藤三衛門
合計 2		
	2	青木清衛門
⑱星野采女組		
	2	内海与十郎
	1	小谷才次郎
	1	塙半兵衛
	1	是ハ采女自分之侍也 田屋市衛門
合計 5		
⑲尾関隠岐組		
	1	兼松甚左衛門
	1	小山喜左衛門
	1	是ハ隠岐自分之侍也 數見宗九郎
	1	此人、金森カ帳ニ落タリ 山田左兵衛
合計 4		
⑳梶田新介組		
	1	松崎左兵衛

※いずれかの組に所属した記載はない

㉑湯浅助左衛門組			
	1	下村助左衛門	
	1	関大学	
	1	関小左衛門	
	1	別所市正若党	
合計	4		
㉒津田主水組			
	1	中村加兵衛	
	1	増田甚介	
	1	同（増田）半介	
合計	3		
	2	福嶋河内	※いずれかの組に所属した記載はない
	3	河内若党共也	※いずれかの組に所属した記載はない
合計	5		
㉓刑部太 <sup>(ツツ)</sup> （大カ）夫（福島正之）扈從			
	1	山路作兵衛	
	1	作久間加左衛門	
	1	同（作久間）千介	
	1	坂井小六	
	1	久三郎 是小六カ鉄炮之者也	
合計	5		
㉔左衛門大夫（福島正則）扈從			
	1	上月助八郎	
	1	星野長介	
	1	吉村助市	
	1	野間市衛門	
	1	山田七藏	
	1	林作左衛門	
	1	是ハ今井八〇（郎カ）衛門カ鉄炮之者也 村山藤衛門	
	1	久次郎 尾関与九郎カ若党也	
合計	8		

（※以下の3名の記載は後日補足した箇所）

	1	鉄炮頭 藤井安衛門
	1	杉浦与七七 <sup>(ツツ)</sup> 組也 二村理衛門
	1	尾関隠岐組 山田左兵衛
右之三人、帳ニ落ツ、余知故ニ爰載		

首帳筆者、金森安衛門、合戦十五日、記録十七日也、十六日江州高宮ノ里ニ陣ス、十七日同国上長原野野陣ス、午ノ時陣所定ル、少間有依テ、之爰ニ顕ス、云々

表 2

福島忠勝大坂陣備人数帳 (慶長19年11月 6 日)

(『広島県史』近世資料編Ⅱ)

【凡例】※…作表にあたり補足した文言・文を示す。

①～⑥…作表にあたり各組名の前に数字を補足した。

《一番備》

1 万 4 2 5 0 石	福島丹波
このほか 6 0 0 0 石は自分の留守居	
2 3 0 0 石	つく田又右衛門
1 万 3 0 0 石	大崎玄蕃
このほか 2 0 0 0 石は代官に引く	
①本城与太郎組	
2 2 5 0 石	本城与太郎
その他、1 3 名	
知行合計 6 0 7 0 石 (※合計 1 4 名)	
②まなへ (真鍋カ) 五郎右衛門組	
4 0 0 0 石	まなへ (真鍋カ) 五郎右衛門
その他、1 7 名	
知行合計 9 9 3 0 石 (※合計 1 8 名)	
扶持方合計 4 3 人扶持	
③蜂屋市兵衛組	
1 5 3 0 石	蜂屋市兵衛
その他、1 9 名	
知行合計 7 4 9 0 石 (※合計 2 0 名)	
扶持方合計 6 5 人扶持	
④沢井右京組	
2 0 0 0 石	沢井右京
その他、1 4 名	
知行合計 6 2 4 0 石 (※合計 1 5 名)	
扶持方合計 2 8 人扶持	
⑤柴田源左衛門組	
3 0 0 0 石	柴田源左衛門
その他、1 5 名	
知行合計 8 8 7 0 石 (※合計 1 6 名)	
扶持方合計 5 3 人扶持	
▼※組名記載なし	
2 0 5 0 石	仙石但馬
その他、3 名	
(※本来ここに小計が入る)	
※知行合計 4 2 5 0 石 (※合計 4 名)	
(※一番備の合計)	
馬乗合計 8 9 人 (9 0 人カ)	
鉄炮合計 1 1 5 人 (1 1 0 人カ) (※鉄炮足軽を指す)	
知行合計 6 万 9 7 0 0 石	
扶持方合計 1 8 9 人扶持	

## 《二番備》

1万5000石	尾関石見
このほか6000石は自分の留守居	
①尾関右衛門太郎組	
5590石	尾関右衛門太郎
その他、6名	
知行合計7320石（※合計7名）	
②かま田（鎌田）主殿組	
3000石	かま田（鎌田）主殿
その他、17名	
知行合計9110石（※合計18名）	
扶持方合計45人扶持	
③梶田新助組	
1300石	梶田新助
その他、21名	
知行合計7310石（※合計22名）	
扶持方合計13人扶持	
④林亀之助組	
1800石	林亀之助
その他、23名	
知行合計9000石（※合計24名）	
扶持方合計30人扶持	
⑤高月左助組	
2000石	高月左介
その他、18名	
知行合計7660石（※合計19名）	
扶持方合計25人扶持	
⑥松田下佐組	
3600石	松田下佐
その他、17名	
知行合計9260石（※合計18名）	
▼※組名記載なし	
1000石	祖父江仁右衛門
（※二番備の合計）	
知行総合計6万5660石	
馬乗合計110人	
扶持方合計113人扶持	
鉄炮合計70人（※鉄炮足軽を指す）	
《備後様（福島忠勝）御旗本備》	
4140石	長尾隼人
このほか6000石は自分の留守居	
①武藤修理組	
3550石	武藤修理
その他、27名	
知行合計1万2680石（※合計28名）	
扶持方合計17人扶持	
▼※組名記載なし	
7490石	津田ふせん（豊前カ） 同虎之助

②斎藤無右衛門組	
1500石	斎藤無右衛門
その他、23名	
知行合計9340石 (※合計24名)	
扶持方合計28人扶持	
③黒田蔵人組	
2800石	黒田蔵人
その他、18名	
知行合計1万160石 (※合計19名)	
扶持方合計15人扶持	
④村上彦右衛門組	
2700石	村上彦右衛門
その他、26名	
知行合計7470石 (※合計27名)	
扶持方合計134人扶持	
▼※組名記載なし	
1530石	橋本惣兵衛
その他、24名	
(※本来ここに小計が入る)	
※知行合計1万6070石 (※合計25名)	
※扶持方合計110人扶持	
(※福島正勝の旗本備の合計)	
知行合計6万7350石	
扶持方合計304人扶持	
鉄炮合計90人 (※鉄炮足軽を指す)	
馬乗合計126人	
《御跡備》	
①牧野主馬組	
6000石	牧野主馬
高7000石のうち、1000石御ゆるし	
その他、17名	
知行合計1万310石 (※合計18名)	
扶持方合計13人扶持	
②森平右衛門組	
1000石	森縫殿之助
650石	森平右衛門
その他、23名	
知行合計8310石 (※合計25名)	
扶持方合計72人扶持	
③坂井主膳組	
2090石	坂井主膳
その他、18名	
知行合計8440石 (※合計19名)	
扶持方合計45人扶持	
▼※組名記載なし	
6900石	津田因幡
(※本来ここに御跡備の合計が入る)	
※知行合計3万3960石	
※扶持方合計45人扶持	
※馬乗合計63人	

（※一番備、二番備、福島忠勝の旗本備、跡備の総合計）

総知行合計 <sup>(マ)</sup> 23万8670石 <sup>(マ)</sup> （23万6670石カ）
総扶持方合計 <sup>(マ)</sup> 736人扶持 <sup>(マ)</sup> （651人扶持カ）
総鉄炮合計 <sup>(マ)</sup> 275人 <sup>(マ)</sup> （270人カ）（※鉄炮足輕を指す）
総侍合計 <sup>(マ)</sup> 388人 <sup>(マ)</sup> （389人カ）

表 3

	一番備	二番備	福島忠勝の旗本備	跡備	合 計
馬乗 (= 侍)	<sup>(ママ)</sup> 89人 (90人カ)	110人	126人	63人	<sup>(ママ)</sup> 388人 (389人カ)
鉄炮 (足軽)	<sup>(ママ)</sup> 115人(110人カ)	70人	90人	なし	<sup>(ママ)</sup> 275人 (270人カ)
知行合計	6万9700石	6万5660石	6万7350石	3万3960石	23万6670石
扶持方合計	189人扶持	113人扶持	304人扶持	45人扶持	651人扶持
組数	5組	6組	4組	3組	18組
組に所属しない指揮官	3人	1人	1人	なし	5人